

特集にあたって

今から二十数年前、考古学を研究している友人のK君と、天皇陵の発掘について語ったことがある。私は、次から次に古墳の発掘が進むことによって研究が進み、古代史像は大いに充実したものになるのだろう、という趣旨のことを語った。これに対してK君は、そうかもしれないが、しかし新発見の天皇陵を今すぐに開いて研究するのが、よいのかどうかかわらないと述べた。K君の発言の意図がよく飲み込めなかった私が、その意図を問うと、彼はこう応えた。今現在の研究水準で研究すれば、それなりの成果が得られると思う。しかしこの先、仮に五十年先であったならば分析方法なども格段に進んでいるであろうから、今では考えられないような成果が得られるのではないか。例えば密閉されたままの古墳の内部の空気や塵は、一千年以上前のものである可能性がある。今の技術ではこれらを分析できないが、将来空气中の塵をも分析できる時代が来るのだとすれば、今、密閉を解いて新しい別の空気を混ぜるのは感心しないことかも知れない。二十数年前のK君の発言を、その時の私は心底からは納得できなかった。私は今よりもずっと性急であった。

K君の学問的態度は、過去から未来へとつながる研究の長い営みの中に、現在の自分の研究を位置づける考え方があった。これに対して私のその頃の研究姿勢は、未来に研究を託すという意識を持たず、たとえて言うならば、自分とともに現在で研究が完了してしまうというような態度であった。その頃の日本近世史の研究者の多くが史料調査に入ると、その人の研究に役立つものだけが価値ある史料で、それ以外の関心の無いものは役に立たない雑史料で、価値の低いものと見なすような傾向があったが、私の研究態度も共通していた。つまりそこには、将来に新しい、多様

な研究視点や方法が生まれるであろうから、将来の研究のために史料を原型をくずさずに保存しつつ研究していこうという意識は極めて稀薄だったのである。

歴史資料保存利用機関である学習院大学史料館では、「日本史科学の基礎研究」のテーマで、私学振興財団の援助を受けて、一九九二(平成四)年より三年間にわたって共同研究に取組んできた。史料をどのように整理するのが、現在のみならず将来にわたる歴史研究に利用しやすいか、また、整理された史料をどのように科学的に保存するのが、よい状態を長く保つことになるのか、などという観点からの研究である。すなわち、自分たちが史料解釈をして歴史像を結ぶという作業に止まらず、史料それ自体を歴史現象の所産として捉える立場から、形態・様式・機能はもちろん、どのように管理され、利用されてきたのかについても明らかにし、歴史研究に寄与しようと目指したものである。

このような共同研究の成果の一部を、本誌第八号に発表できるのは喜ばしい限りである。従来、等閑視されることの多かった書籍史料に光を当て、その整理・調査の方法を説いた藤實久美子論文は史料学にふさわしい成果となった。また、稀覯性の高い、新出の西園寺家所蔵『万一記』について、紙背文書も含めた翻刻と考証を行なった新田英治や大原幽学に関する新史料を紹介した斎藤洋一の労作は貴重史料の活用 に 途を開いた。上野秀治論文は、主に大名家(土佐山内)文書中の將軍からの御内書に関する実証的な基礎研究であり、西田かほる論文は甲州国中地方の神社所蔵史料からの分析成果で、いずれも膨大な未活字史料の整理作業のたまものといえる。桑尾光太郎論文も戦前期発行の雑誌をいかに客観的な歴史史料として活用するか的方法的工夫が見られる。しかし、本共同研究はまだ多くの課題を残している。今後とも一層の研究を重ねていく所存であり、大方のご教示を願うものである。

一九九五(平成七)年三月

学習院大学史料館長 高 埜 利 彦